

# The Reminiscence of Exellia NG+1

行くぜ、ダチ公

## 作成レギュレーション

### 基本概要（新規／継続）

- ・ 経験点：96500／108000 点
- ・ 資金：147000／171000G
- ・ 名誉点：1500／1800 点
- ・ 成長回数：204 回
- ・ レベル制限：11～12
- ・ アイテムレベル制限：武器ランク A 以上

### 各種制限

- ・ ヴァグランツ、蛮族 PC 禁止
- ・ SW2.0／2.5 標準流派入門禁止
- ・ 武器防具強化に関する特殊制限
- ・ シナリオ報酬の成長回数が 10 以上のとき、60%以上の偏重割り振りの禁止

## 多元宇宙迷宮用ハンドアウト

### GM 用メモ：場面

- ・ 場面 1（心理迷宮 a）：PC1、PC2、PC4
- ・ 場面 2（心理迷宮 b）：PC3、PC5、PC6
- ・ 場面 3（心理迷宮最奥）：全員
- ・ 場面 4（シナリオボス）：全員

### GM 用メモ：役割分担（TRExLap2 本編版）

PC1：メイナ・メイルシュツルム

PC2：レライエ

PC3：グレイ・シルヴァハンド

PC4：ファムル・アズラン

PC5：モネ

PC6：クーロン

### PC1「変化の子」

あなたは時代に合わせ変化を続けてきた者だ。

己が人型を保っていること自体に不信感を持っているだろう。

本当にあなたは、人間であるのだろうか。その姿は、実のところ、兎とも蛙ともつかないものなのではないだろうか？

今一度、この迷宮であなたに問おう。あなたは、誰だ？

<他 PC への反応>

PC2：敵対。ぶつけてでも落とす。

PC3：ちったあ PC2 に考えさせる。

PC4：無関心。

PC5：敵対寄りの中立。

PC6：PC2 にバリア貼らなくていいから。

### PC2「考え得ぬもの」

あなたは考えることをせずに生きてきた。この傾く世界で、その変化を感じずに。

考えないのであれば、それは人である必要はないだろう。では、あなたという存在は、果たして本当に人なのだろうか？かつて家を飛び出したときに、あなたは既に死んでいたのではないだろうか？生き残ったときの感覚で、あなたは知らず知らずのうちに、好物に毒を盛っていたのではないか？

今一度、この迷宮であなたに問おう。あなたは、誰だ？

<他 PC への反応>

PC1：ニコルの二の舞になればいいのに。

PC3：考えるのは任せた。

PC4：のぼらせろ。本能がそう言ってる。

PC5：尊敬。

PC6：何で無視するの？

### PC3「銀の腕」

あなたは常に、誰かを頼りながら生きながらえてきた者だ。しかし、今のあなたには、あなた自身の存在を証明する誰かがいない。あなたがあなたであるという証明をする証拠などなにもない。

冒険を望もうにも、この場所で冒険者であることを証明することができないだろう。

ではなぜ、今の今まで生きながらえている？

今一度、この迷宮であなたに問おう。あなたは、誰だ？

<他 PC への反応>

PC1：誰だあなたは。

PC2：頼られる理由に心当たりがない。

PC4：無関心

PC5：知らないのに、頼りたくなる気分になる。

PC6：同じメリアでなぜこれほどの差が。

#### PC4「竜を屠る者」

あなたは、何かしらの憎悪故に、竜を屠ってきた。あなたの功績を心から称える者は、あなたの知識の限りでは知らないし、誰もいない。そう、ここには外からあなたを定めるものはなにもない。

ではなぜ、何があってその憎悪が生まれているのか？

今一度、この迷宮であなたに問おう。あなたは、誰だ？

<他 PC への反応>

PC1：タスケテ。なんでそんな冷たい目を向けるんだ。

PC2：寄るな。殺すぞ。

PC3：路傍の石だと思っている。存在する価値を見いだせない。

PC5：その知識量は讃えるが、それはそれとして邪魔。

PC6：無関心。

#### PC5「動く図書館」

あなたは、その知識量が理由で、周りから「図書館」と讃えられていた。

しかし、静的な物体で讃えられたために、自身が人なのか、それともモノなのか判別がつかなくなっている。あなたはあなた自身の名前を忘れたわけではないが、それが図書館の名前なのか、人の名前なのかが分からない。

では、なぜこの迷宮にあなたの意識は迷い込んできているのだろうか？

今一度、この迷宮であなたに問おう。あなたは、誰だ？

<他 PC への反応>

PC1：ヒール弱いよ、なにやってんの。

PC2：地雷っぷりはニコルと代わらない。

PC3：敵対する理由がない。ただ関わる必要性はあると考える。

PC4：のぼらせる。本能がそう言ってる。

PC6：バリアヒーラーってやつだね。

## PC6「算術を極めし者」

あなたは、天才的な算術の腕で、学者にまで上り詰めた者だ。

しかし今、あなたは自らの算術の腕に疑問を持っている。もし自分の算術の腕が低かったのならば。もし自分が、前線に立って敵を殴り殺す役目を担っていたのなら。

あらゆる可能性を総括して考えた結果、あなたは可能性の分岐点に立ち、どれが正史だったのかも分からない状況にある。

今一度、この迷宮であなたに問おう。あなたは、誰だ？

<他 PC への反応>

PC1：無。関心とかの感情さえ湧かない。

PC2：PC1 がボコっているのですという役なのだろう。

PC3：よく MP 寄せせとは言いが、そういう種族だったのかを思い出せない。

PC4：よく登られているのですという役なのだろう。

PC5：どこからそのドラゴン召喚した。

## 動画用メモ

### いけ好かない青年

読み上げ：未定

エレン・イエーガー（終尾の巨人顕現前）。その顔はノイズに紛れ、認識できない。

### アネキ

読み上げ：継星あかり

要するに、もしもの世界線のエクセリア。彼女がつけるはずもない装飾品の数々をつけており、あからさまに悪党に見える。

### 暗魂のエクセリア

読み上げ：継星あかり

DSTREA 時代のエクセリア。今後のためにも新装版として新規に再作成。スノウホワイトの古代人口ローブ（ソピステスローブ）に身を包んでいる。武器については、現代と同じ双刀（結月+月光、および骨喰【絶】+アイスクーネ RE）と、両手剣（ノートゥング【絶】）。ちなみに、TRExLap2 における古代世界も同様。

## 導入

### 心理迷宮 a

何者でもない君達は、見知らぬ場所に揃って放り込まれた。

君達であることを証明する装備の類はなく、平民の装束に、素手という状況だった。

(※GMメモ：RP待機)

そこは、見る限り平凡な街の中で…、どことは分からないが、そこは安寧が約束された場所だということが、この場に何の前知識もなく放り込まれた君達であっても分かる。

この空間を望んだ、君達自身の意志なのだろうか。それとも、その心に巢食う、可能性の獣の仕業なのだろうか。理屈は分からないが…、君達の中の勘が、これを本物と捉えることを拒絶していた。

(※GMメモ：RP待機)

そこに、見慣れない…いや、見慣れないという言葉で表現するのは、今の君達にとっては不釣り合いか…、少なくとも「理解の埒外の」恰好の男が現れる。

迷宮の男

「貴様らが信じる、仲間との絆の力。それは、この場所にはない。

貴様らは、自らの可能性により、この牢に封じ込められるのだ」

(※GMメモ：RP待機)

道を行き交う、さまざまな色の機械たち。その機械の中には人が乗っており、知識がなくともそれは、人のためのものであることが確実に分かった。

そこへ、ふらりとひとりの青年が現れる。いけ好かない恰好をした、黒髪の男だ。

知らない顔。…いやむしろ、君達は顔自体を認識できていない。自分が、何者でもないということが…他人の認識を鈍らせていた。

ぼけーっとしていると、彼から見て認識できたのか…、彼が声をかけてくる。

いけ好かない青年

「どうした。お前達は、ここにいてはいけない人間のはずだが」

彼がそう言った途端、背景が変わる。

見る限り平凡の街から、周りに何も認識できるものがない『白い砂漠の最中』へ。

(※GMメモ：RP待機)

いけ好かない青年

「俺が誰かなんてどうでもいい。重要なのは、それから先。お前達はどうしたい。そのままこの迷宮で突っ立ったまま、何もできずに崩れ落ちるか。可能性をかなぐり捨てて、ただ目的の為に邁進するのか」

(※GMメモ：RP待機)

選択肢は発生せず、またPCの発言を、「可能性をかなぐり捨てて邁進する」という単語のみを青年は認識する)

君達の反応を顧みて、青年は言葉を紡ぐ。

彼自身も、君達がここにいることに、迷いを持っているようだ。

(※GMメモ：RP待機)

いけ好かない青年

「…ああ。お前達は自由だ。だがな…、これだけは忠告しておこう。可能性を持つからこそ人間だ。それと同時に、それは宇宙をも蝕む毒でもある。お前達は、自由という名の牢獄に囚われ、ただ律の駒の思うように、利用されているだけに過ぎない」

青年ごと、画面にノイズが掛かる。

それは、誰もが考え得る「しあわせ」の終わりを指し示していた。

心理迷宮 b

掘る。ほる。ホル…。何者でもない君達は、「アネキ」の指示の下、盗掘活動を行っている。しばらくして、掘削道具の感覚から、目的地に辿り着いたことを理解するだろう。

アネキ

「調子はどうだあ、手下たち？」

(※GMメモ：RP待機)

アネキ

「頼むよ。お前達の腕だけが頼りだ」

そう言って、君達と「アネキ」は魔道具店の地下から店内に侵入する。

(※GMメモ：RP待機)

アネキ

「うひょー、こいつはすげえ！」

…粗方、店内の魔道具を盗んだあと、君達は下水道で品を検める。

アネキ

「うまくいったなあ。…うひょーつ、たまんねえなあ。こんだけあれば、暫くは遊んで暮せるねえ！…ほれ、遠慮することはねえ。お前の分け前だよ手下たち」

(※GMメモ：RP待機)

…そして、盗品を換金したあとに…繁華街の食堂に入り、そこで「アネキ」と共に、豪華な食品を食べていた。

アネキ

「どうだ！やっぱりブルライトを出て正解だったろう？同じ冒険稼業でも、都の下ならやりたい放題だぁ！…蛮族どもには敵いっこないが、奴らの目を盗んで金目の物をいただきゃあ、ここでの暮らしには困らない。君達が掘って、私が盗る。これからも頼むよ、手下たち」

(※GMメモ：RP待機)

## 幻想を打ち破れ

### 心理迷宮 a

君達が新たに見た景色は、初めてフレイディアに来たときの光景。…否、それは光景というには過小評価が過ぎるだろう。

そこで、待っていた者がいた。

ヒューガ

「…全く。僕達の冒険で、何かに囚われることが多いもんだねえ。なあ？」

(※GMメモ：RP待機)

ヒューガ

「なくしたの？探究心」

(※GMメモ：RP待機)

ヒューガ

「馬鹿野郎！…フレイディアにて悪名轟く冒険団！男のロマン背中に背負い、乾坤一擲にて敵を穿つ！桐ヶ谷家の現当主、桐ヶ谷氷龍様がぁ、そう何人もいてたまるかよ！」

(※GMメモ：RP待機)

ヒューガ

「そうだ。だから…星の意志か、無限の幸福か。好きな方を選ぶんだ」

そんな無茶な！と君達はいいたくなるかもしれない。確かに、それを押しつけるのは無茶と言えよう。だが、『黒の剣士』のときの彼とは違い…、そこに説明できるほどの貫禄があった。

(※GMメモ：RP待機)

ヒューガ

「忘れたのかな？僕の無茶に付き合ってくれたのは、君達なんだ。僕の『進め』に中身をくれたのは、君達なんだよ！君達の意志は、その辺の石ころとは違うはずだ！

君達の未来はその胸の中だ。…いつまでも、こんなところでだらだらしているんじゃねえよ！君達の意志は、何のためにある？」

PC への選択肢

- ・…そうだな、一緒に行こう。
- ・冒険者の意志として、この夢幻を討ち祓おう。



そう言った瞬間、君達とヒューガを包む景色が割れていった。

## 心理迷宮 b

アネキ

「すまねえ！すまなかった！許してくれえ！な？このとおーりだ！勘弁してくれ！

俺達が悪かった！何でも言うこと聞くからよお！頭下げるって言うならいくらでも下げる…！」

「アネキ」が蛮族に謝り続けている後ろで、君達は背後の箱が鼓音を響かせていることに気付く。しかしなぜだろう、ちょっと簡単なことをすれば開きそうなのに、それを成すための道具を持っていない。

君達はその違和感に気付くと、後ろから聞き慣れた声を聞く。

聞き慣れた声

「どうした、冒険者？」

(※GMメモ：RP待機)

君達はその声に気付き、後ろを振り返ると、見慣れた顔で、かつどこことなく幼い印象を受ける装いの…エクセリアがいた。

エクセリア

「なくしたの？武器」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「…私が盗掘なんてすると思うか？私は真っ当に権利を得てから、採掘ないしは探掘をするタチだぞ？最後の薪の王にして、最果ての聖王であり、始原の十四席として、最高決定機関にその名を連ねた者…。エクセリアが…私が、そう何人もいてたまるか！」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「君達が描いたその幻想は…、きっとそうあってほしいと願った末の代物なんだ。私じゃないよ、それは。…魂が違ってても、その本質はちゃんと視てる。一介の冒険者が、こそ泥なんて恥ずかしいだろう？」

そう言って、エクセリアはその両手剣で「アネキ」を斬り飛ばす。

エクセリア

「ほら、あったよ。君達を示すものが」

エクセリアに言われるがままに、「アネキ」の残骸からこぼれ落ちた、君達の獲物を箱に触れさせる。

そして、箱が開くと同時に、世界が光に包まれる。

**心理迷宮最奥（分岐合流）**

己を認識した君達は、この夢幻の終わりに直面する。

暗魂のエクセリア

「行け、冒険者。」

『もし』とか『たら』とか『れば』とか…、そんな想いに惑わされるな。自分の選んだひとつの『<ruby>事</ruby>みち</ruby>』が、お前の宇宙の真実だ」

(※GMメモ：RP待機)

ヒューガ

「おいおい！僕も忘れてもらっちゃあ困るよ！」

(※GMメモ：RP待機)

ヒューガを視て、エクセリアは思い出そうとするが…認識できず、ただ一言話す。

暗魂のエクセリア

「誰だっけ？」

ヒューガ

「黒の剣士のヒューガだよ！また忘れたのかエクセリアさん！」

暗魂のエクセリア

「へっ…。バーカ、私がどこの時間軸の人間だと思ってる？」

(※GMメモ：RP待機)

言い合いをする彼らを他所に、君達は天を仰ぐ。

(※GMメモ：BGM「“Liberate me” from hell」)

天を仰ぐ君達を、2人の『英傑』が見る。

暗魂のエクセリア

「…いつの間にか、背を抜かれちゃったなあ」

(※GMメモ：RP待機)

PC への選択肢

- ・行くよ、エクセリア
- ・行くよ、ヒューガ

暗魂のエクセリア

「ああ。今度こそ、本当に『あばよ』だ。行けよ、冒険者」

(※GMメモ：RP待機)

ヒューガ

「…ああ！」

PC への選択肢

- ・夢は終わりだ！
- ・行くぜ、ダチ公！

君達の、その掛け声と共に…、君達は天に光を描きながら飛び去っていく。

その光景を眺めながら、エクセリアはこの夢幻の終わりを理解する。

ヒューガ

「これ以上はいいの？」

暗魂のエクセリア

「ああ。死んだ者は『死んだ者』だ。無理に干渉したとしても、後から続くものの邪魔になるだろう？…同じ、『終わってしまった世界』から、こうして理を突き破ってまで、この世界に干渉したんだ。これ以上の干渉は野暮だってものだろう…」

ヒューガ

「そうだね…。行ってこい、僕の仲間」

<hr>

(※GMメモ：BGM「お前のxxxで天を衝け！」)

甘い夢を抜け…君達は、この迷宮の最奥に辿り着いた。

まどか

「馬鹿な…。知的生命体が、この迷宮を踏破できるわけがない」

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

『なめんじゃねえ！』

拳げ句、次元の壁を突き破り、エクセリアが現れる。

エクセリア

「時間だろうが、空間だろうが、多元宇宙だろうが…！そんなこと知ったことじゃねえ。てめえの決めた道を、てめえのやり方で貫き通す！それが私達、《暗魂の暁》だ！」

全員が一斉に、ひとつの召喚獣に顕現する。

すべての可能性をひとつに集約し、その迷宮の最奥に、その像を映し出す。

まどか

「…またしても、その姿で抗うか…！」

それに嫌悪感を抱いたまどかは、魔弾を数発放つ。

しかしそれは一切当たらず、対しコズミック・クェーサー・リズンが放った炎弾は、まどかが『能力』を使わなかった場合、当たってしまうような軌道に入る。

エクセリア

『…埒が明かないな』

まどか

「…ああ。いい加減、その肉体を渡してもらおうか？」

そう言って、まどかはコズミック・クェーサーの顔面に転移する。

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

『…ああ、お前がそこに来ることは読んでいたよ』

そう言って、エクセリアは地面から炎の鎖を出現させ、まどかを拘束する。

まどか

「…無駄なことを…」

エクセリア

『ここで戦ったとしても、私達には勝ち目がない。

…だから、ここからの脱出のために、一時的に撤退してもらおうか』

鎖を地面から抜き取り、その両腕で掴む。

エクセリア

『地平の果てに…、吹っ飛びなァ！！』

まどか

「貴様ァァァァァァ！」

まどかはこの迷宮の外へと吹っ飛ばされていき…、そして、管理者を失った迷宮は消え、顕現も解け、元の場所へと戻る。

(※GMメモ：RP待機)

しかし…周囲の様子がおかしい。

周りには魔力の障壁が形成されていて、到底脱出できるような状況ではない。

(※GMメモ：RP待機)

まどか

『まさか、ここまでしてくるとは。だが…私の目的の為、貴様らは確実に排除する』

君達の目前に…、なにか光の靄が現れる。

そこから現れたのは…言葉で表現するのは難しいレベルのなにかだった。

**敵：此岸の魔女**

君達は、現れた存在を撃滅した。

(※GMメモ：RP待機)

君達がそこから去ろうとすると…爆音と業炎がそこに現れる。そこに現れたのは、ひとりの少女。それは、虚な目で君達を見ていた。しかし…。彼女の攻撃が、君達に届くことはなかった。見るとそこには、胸元を貫かれた少女と、その胸元を貫いたエクセリアの姿があった。

エクセリア

「…お前の思うようにはならない」

そう言い残し、エクセリアは少女を切り裂いた。

…魔力の障壁が消えていく。君達の元に、再びまどかが現れる。

まどか

『多元宇宙迷宮に、此岸の魔女でさえも太刀打ちできないとは…』

(※GMメモ：RP待機)

エクセリア

「これ以上、お前に世界を乱させない！お前の旅はここで終わりだ！」

まどか

『…その肥え太った自我で、貴様が何を成そうというのだ？』

(※GMメモ：RP待機)

まどかの指摘に、エクセリアは困惑したように表情を歪める。

君達の反応をよそに、まどかは言葉を紡ぎ始める。

まどか

『私の欠片より生み出された存在…。そして、その欠片が転生を重ねた姿。

それが貴様であり、その欠片の源流は私だった。律は「もしもの可能性」の鹿目まどかを生み出し…。そして「鹿目まどかが取るはずも無い選択」を取らせ続け…。そして殺人鬼に殺させて終幕を迎えさせた。その折に魂は割れ、その欠片を未だ見ぬ誰かに継がせた。

貴様は所詮、律によって造られた、世界を運ぶための機構に過ぎぬ。

私は、貴様の身体で再誕を果たし、この世界を破壊することで…。この無情な輪廻を止めようと言っている。未来を願うのなら、私の意志に従え』

(※GMメモ：RP待機)

それを聞いたエクセリアは、深いため息をついた後…。その血のように赤い双眸を彼女に向ける。

エクセリア

「續めよ殖やせよと、律が望み…。しろがねの君を大地に放った。

お前にはあったはずだ、自分の物語を、自分の意志で紡ぐ力が。

お前はただ、逃げただけだ…。自分の物語を、その意志で描き出すことから…！」

(※GMメモ：RP待機)

まどか

「…いいだろう。財団が放った、最後の魔動機。それを退けることができたのならば…、  
貴様を、その仲間ごと、敵と見做そう」

そう言って、まどかは消える。

エクセリアは、己のそばに、懐かしい気配を感じ取る。

エクセリア

「心配か？…大丈夫。『自分』の落ち度は己の意志でつけるさ。

だから、安らかに眠っていてくれ。最初に終わった世界のエクセリア」

## 報酬

### 経験点

・基本：7000 点

### 資金

・基本：20000G

### 名誉点

このシナリオに名誉点報酬はありません。

### 成長回数

・基本：8 回